

三. 佐藤紅緑編と八木健編の「滑稽俳句集」を読む 稲葉純子

佐藤紅緑編と八木健編、それぞれの「滑稽俳句集」を比較することで滑稽俳句の行く末を展望してみたい。以下、佐藤版と八木版と表示して、論を進める。

「滑稽俳句集」編集の動機

佐藤紅緑は、「滑稽文学の振るわぬ今日に於いて、俳句の滑稽趣味を幾分か世間に紹介し併せて元禄より今日に至る變遷(へんせん)を知るの便もあろうかと著者の寸意を諒察して貰いたい」と記す。

八木健は、「俳句は本来、滑稽なものであるが、松尾芭蕉が滑稽を『軽み』として軌道修正、正岡子規が方法として『写生』を重用し、後継者となった高浜虚子が『客観写生』を掲げ、ついには俳句を花鳥諷詠の文芸と規定したために、滑稽は益々片隅に追いやられてしまった」と、失われた滑稽を俳句に取り戻すことの必要性を書いている。

佐藤版、八木版ともに「滑稽の振るわぬ状況の改善」を企図したものという点で同じと言える。

収録作品の作者の意識

次に、作者の意識には、如何なる違いがあるのだろうか。佐藤版について言えば、作者は滑稽俳句を意識的に作ったわけではなく、多くの作品の中から紅緑が「滑稽俳句」と判断し、それらしきものを拾い上げたにすぎない。しかし、八木版の作品は、月刊誌『俳壇』の滑稽俳句欄に掲載された、十三年間の三千句であり、作者がそれぞれの滑稽観で意図的に作った滑稽俳句ということになる。

作品の比較

更に、収録されている作品の比較をしてみよう。

甘酒に舌を焼いたる恋もあり 鳴雪(佐藤版)

さの行のおしまひはそよ春の風 氏家頼一(八木版)

鳴雪は、決して甘い恋ではなかった苦い思い出を、言葉遊びでうまく表現している。氏家の句は、佐藤版の言葉遊びと比較して「軽さ」があり、誰も気づかな

かった意外性がある。

涼風の曲がりくねって来りけり 一茶(佐藤版)

軒風鈴空気読めぬとおろされる 小林英昭(八木版)

一茶の句は、曲がりくねって来たと一物仕立てにて、まずは現状を描いているが、小林の句には「軒風鈴」で「切れ」を作り、「おろされる」というドラマが描かれた。

熱き顔涼しき顔と彩りぬ 牛伴(佐藤版)

動画から静止画となり紋黄蝶 山本賜(八木版)

牛伴は、「熱き顔」と「涼しき顔」を対比して、そこに生ずる違和感に滑稽を表現。山本は、動画と静止画を「となり」として、経過を巧みに表現した。

折鶴に入るるや螢の尻の穴 五明(佐藤版)

静けさを確かめてから木の実落つ 金澤健(八木版)

折鶴の尻穴に螢を入れて楽しんだものと思われる。当時は可笑しい出来事として句にしたものだろう。金澤の句は、何でもない出来事にもかかわらず、木の実を擬人化して「静けさを確かめてから」としたところに滑稽の巧みがある。

紅緑は、滑稽俳句集の出版で「俳句に滑稽」を定着進展させようと企図したにもかかわらず、自身は小説の執筆に方向転換をしてしまった。「滑稽俳句集」は、その後、編集、出版を企画した者は現れず、平成二十七年の八木版「滑稽俳句集」迄、百年余りの空白をつくることになった。

今回、佐藤版、八木版を比較しながら読むことで、滑稽俳句には時代や作者それぞれの視点の「オリジナル」の魅力があり、類句や類想を離れた、全く新しいものが今後も生まれ続けていく事を確信した。

最後に八木健会長の作品で論を閉じさせて頂く。

新涼の水新涼の蛇口より 八木健 (完)